

# 日本列島における, 地形用語としての谷と沢の分布 —古代民族の文化圏との接点を探る—

隅田 実<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

地質調査の際に必ず出合う地形に谷と沢がある。筆者は長年に亘る野外調査の経験から、谷と沢の呼び名に地域性のあることに興味を抱いた。

本稿は、(社)地下水技術協会に投稿した内容(隅田, 1998)とかなりの部分が重複するが、谷と沢とに關係する筆者なりの見解を広く地質調査にたずさわっている方々に知っていただきたく、あえて地質ニュースへの寄稿を思いたった次第である。

小学生時代に聞いた話であるが、我が国の川の調査の為に欧米から招かれた技師が日本の第一級の川を見て『これは川ではない。滝だ』と言ったとか、帰国に際して神戸港で、『日本にも大きい川があるじゃないか』と、瀬戸内海を指差して言ったとか、そういうエピソードをずっと憶えていて、さて、北米や南米で、十年間ばかり歩きまわって見て、あらためて同じ川と言っても実態は天と地程の差があることを実感したものである。後述するように、このエピソードの滝が、沢の語源に關係していることが解かったのは大変愉快なことであった。

地形用語としての谷と沢については、すでに古代語の研究書や多くの大辞典に解釈や定義が述べられている。しかし本稿の目的とする所はこれらの内容とはいささか異なる。というのは、地名としての、何々谷、何々沢と呼ばれる、何々に相当する名前には全く關係なく、単に谷、沢の分布状態を調べ、それから古代民族の勢力圏や文化圏との關係を推理することになるからである。

そのような訳で、内容は理学的でも工学的でもなく、本来、言語学、民族学、考古学などの諸分野が關連している問題であり、筆者の仕事として来た地質学とはかなり距離があることを承知の上で書

いた。一時、谷と沢の分布状態を読み取っていたが、筆者と共に古代の歴史に思いを馳せていただければ幸いである。

## 2. 発想の原点

私は1952年、同和鉱業(株)に入社し、最初の赴任地、秋田県の北端に近い花岡鉱山において資源探査に従事して以来、東北地方に14年間、中国地方に5年間を、鉱山および野外調査に費した。また、北海道は卒業論文のフィールドでもあり、その後もしばしば訪れた。

1956年、島根・山口両県境付近を調査した折に、錦町・宇佐川の支流、長瀬峽の一部の深谷峽にかかる高さ100mにおよぶ橋を渡ったことがある。現在は中国自動車道がすぐ近くを走っていて、一瞬のうちに通りすぎてしまうが、当時は岩国から岩日線(現錦川鉄道)で終点錦町下車、宇佐川に沿って国道434号を遡り、宇佐郷で深谷に達し、橋の上からスリルを感じながら谷底を見下ろしたことを思い出す。

一方、1972年頃、秋田県・大館市と小坂鉱山を結ぶ小坂鉄道の沿線に新しく黒鉱鉱床が発見され、付近の沢の名前をとって深沢鉱床と命名された。黒鉱というのは、金・銀・銅・鉛・亜鉛などを高品位で含有する複雑硫化物鉱石のことである。深沢鉱床は、いわゆる露頭がなく、すべて地下深所に賦存する潜頭鉱床であったので、開発する為には、斜坑によって大型の採鉱機械を持ち込み、地下水や地盤沈下などの問題を解決しながら採掘したことで有名になった。鉱床周辺の沢の分布を第1図に示した。

このように、二つの非常に離れた地域で、同じよ  
キーワード: 地形用語としての谷と沢, 縄文人, アイヌ語

1) 東京都杉並区宮前2-29-23-321



る大白山系を含む)地理志の買旦忽、徳頓忽、首乙吞など、旦、頓、吞のつく谷の地名が東北朝鮮の咸鏡道や江原道に残っている。我が国でも、谷をタン(富山県立山地方)、ダン(同県五箇山地方)という、また谷とは、山と山との間のくぼみや水のある所、また断層や地くずれなどでできた凹地形とある。

谷という字は、八が二つ、口の上について、下流に向って開いてゆく様をあらわす字を宛字としたものといわれている。

沢：山間などの湿地。水の溜っている所や木の茂っている窪地。山あいの水のある所、すなわち谷川のことなど。サワはサワ(騒)で、水音による擬音か？ というもの。またこの用語は西日本では湿地の意味で使われ、東日本では谷、溪谷の意味とされている。

沢の元の字は澤で、潤澤、ゆたか、うるおい、などの意で、これは、水や食料が豊富にある場所の意からの宛字と思われる。

また、地名用語語源辞典(楠原佑介ほか、1981)によれば、「西日本の湿地系のケースを含めて、日本語もアイヌ語も同系同源の語から派生した用例と見たい」と述べている。このアイヌ語との関係については後述したい。

鏡味完二は、河川名につく地名語尾の沢、谷の分布を調査し、東日本の沢に対し、西日本は谷型とした。しかし同時に、河川の支流、支谷を意味する地名語尾・サワの分布としては、この認識はおおむね正しいが、これを更に敷衍して、サワがあたかも東日本だけの地名用語であるというような結論にはならないとも述べている。

さて、これまでの諸辞典や研究書の解釈は、谷や沢を、自然地名、集落名、耕地名など、すべてを混合、網羅したものであり、また谷と沢を異なる自然物として、時には感覚的に取扱っているように思われる。

## 4. 谷と沢の分布

### 4.1 谷や沢と川とのちがい

調査には、筆者の歩いたフィールドの資料、国土地理院発行の地形図、各種道路マップ、登山ガイド

ブックなどを用いた。

現在市販されている国土地理院の地形図では、飛騨山脈や紀州山地、その他一部の地域を除くと、ほとんど谷、沢の名は見られず、中流から下流の川に統一されてしまっている。しかし、登山用ガイドブックには、かなり詳しく谷、沢の名が記されているものがあって有用であった。但し、峡谷、溪谷、地獄谷など、近代になって名付けられたと思われるものは含めなかった。

川という名称はどのような語源に発するのか、また古代において谷、沢との関係はどのようであったのかは不詳である。おそらく中国から、それも孔子の時代(5~6世紀頃)には、川の字(川は正字)が使われていて、一般に水の流れている傾斜地をセンと言ひ、川あるいは川の形は、兩岸の間を水が流れている様をかたどる象形文字から発達し、後に日本に持ち込まれたものようである。ちなみに河という語は、中国では黄河とその支流のみに用い、江は長江をはじめ他の大きい川に用いられている。なお原語学的には、カワは中国のゴウから転じたとも、アイヌ語として残っているゴウからの転語とも言われている。

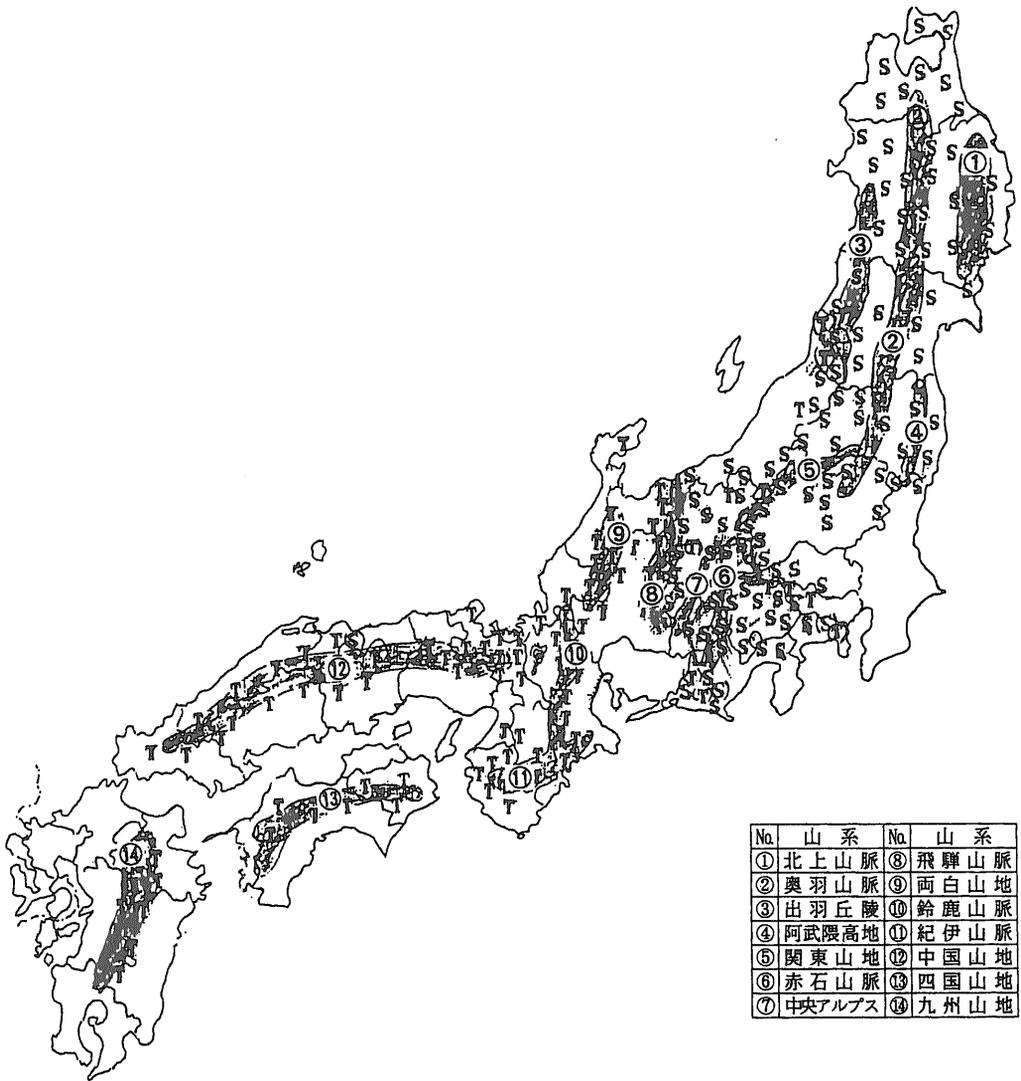
現在の我が国の地図で見ると、川はすべて谷、沢の中~下流であり、更に海に注ぐまでの本流につけられている。その上、川は全国共通であって、おそらく中国大陸からの文化が我が国に浸透し、日本の民族が全国統一されてからの呼び名であろう。

なお、河川名辞典によれば、谷、沢の名を単に谷、沢としたものは極く稀で、語尾に川をつけて、何々谷川、何々沢川としている。

### 4.2 谷と沢の分布の概観

本稿の主旨に沿って調べた谷と沢の分布を、本州、四国、九州の主要な山岳地帯にプロットしたものを第2図に示した。(図面上では谷をT、沢をSで表した)。

先ず第一に目につくのは、日本の背骨と呼ばれる飛騨山脈を境として、西側は谷、東側は沢に、ほぼ統一されていることである。この地名の分水嶺は、地質学的には、糸魚川-静岡線(大地溝帯あるいはフォッサマグナ)の東側に平行して走っており、南端は御岳南麓まで続いている。



第2図 本州・四国・九州における谷(T)と(S)分布図(隅田, 1998).

次に第2図についてやや詳しく眺めて見ると、飛騨山脈の中央部(第3図)、飛騨山脈の北部(第4図、第5図)、東京都・埼玉県・山梨県の境界付近(第7図)、および新潟県全域の四地域で谷と沢が混り合っている。また図示していないが、屋久島では、沢、谷、川が入り混っている。北海道の場合には、谷はなく、河川を意味するアイヌ語のナイ、ペツの宛字である、内、別が多く、沢も数多く見られる。

#### 4.3 谷と沢の混合地域

##### 4.3.1 飛騨山脈中央部(第3図)

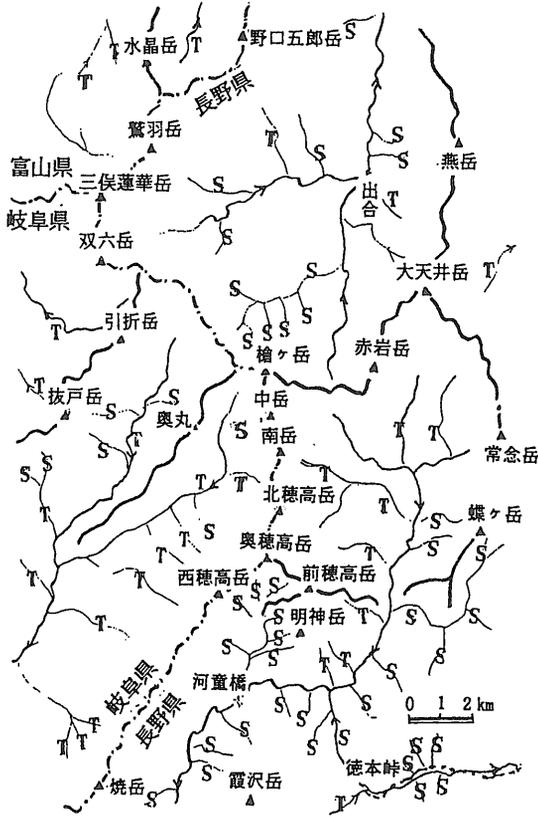
穂高岳南東の明神岳東麓には谷が小さい区域を占め、分水嶺を越えて西側からの僅かな越境が見

られる。しかし全体としては、槍、穂高を結ぶ背梁によって、西は谷、東は沢であり、南にのびて乗鞍岳、御岳に連なり、御岳以南で地形の高度が下がるにつれて、谷、沢の区別が不鮮明になる。

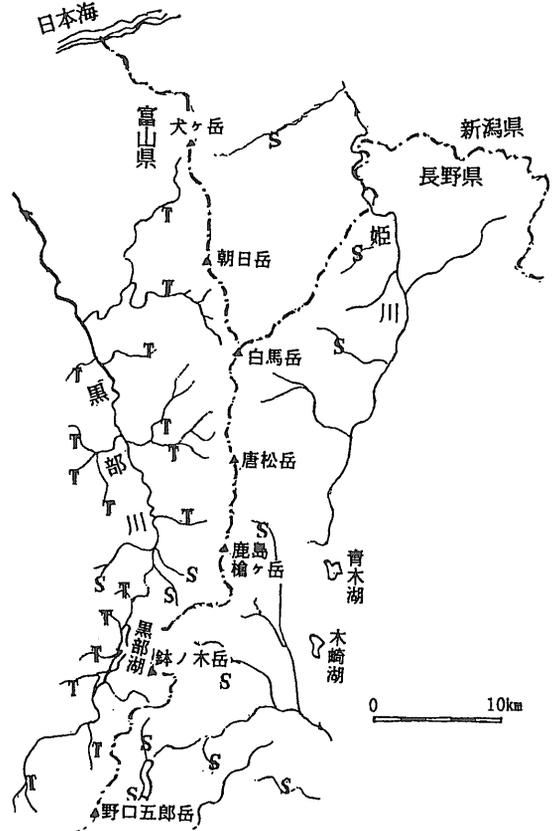
飛騨山脈の北部から最北部の地域は、図に見られるように、黒部川の支流の谷、沢混合区域を除き、やはり西が谷、東が沢となっており、分水嶺は北へのび、白馬岳、犬ヶ岳、黒姫山の各峰を経て、親不知の東方の断崖を以て日本海に没する。

##### 4.3.2 赤石山脈(第6図)

それでは、日本第二の高峰、白根山北岳を主峯とし、海拔3,000m以上の山脈としては飛騨山脈に



第3図 飛騨山脈中央部(隅田, 1998).



第4図 飛騨山脈北部 黒部川・姫川流域(隅田, 1998).

勝るとも劣らぬ赤石山脈の場合はどうか。予想に反して、甲斐駒ヶ岳と仙丈岳の西側に少数の谷が見られるほかは、すべて完全に沢で占められている。山脈の長野県側は、西側に中央アルプスが南北に走っているが、その山系の周囲もすべて沢の区域となっている。

### 4.3.3 新潟県

南部から北部にかけて、沢の区域内に谷が点在している。この地域のように、海岸に比較的近い山岳地帯については、更に詳細に調査をすれば、谷、沢混合箇所がもっと見付かるかも知れない。

人々の移動、つまり文化の移動は海岸地帯の方が山岳地帯よりはるかに容易であり、また舟を用いてより遠くまで足をのぼすことができたと思われる。

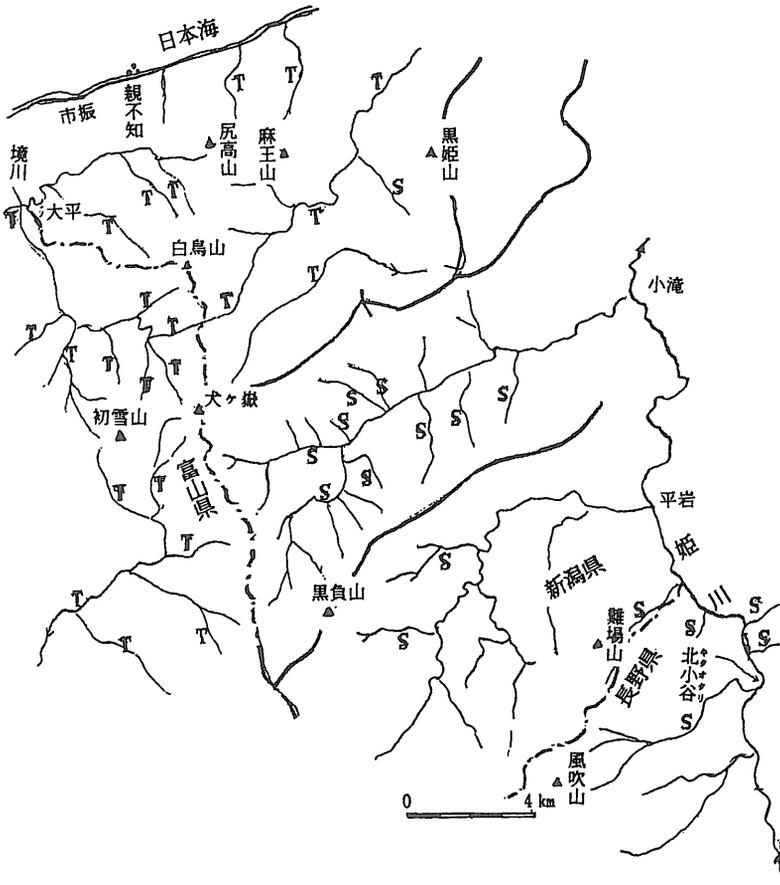
### 4.3.4 東京都西部(奥秩父・奥武蔵地域, 第7図)

ほぼ東西にのびる山梁の南北両側のかかなり広い

範囲に、谷・沢混合地帯がある。

この地域の谷、沢混合パターンは、飛騨山脈中部その他とはかなり異なっている。此处では、一つの谷、あるいは沢の中で、谷の上流が沢であったり、沢の上流が谷であったりしている。飛騨山脈の場合を、仮に谷や沢の文化の短期的あるいは臨時的越境と呼ぶならば、本地域の場合を何と呼べばよいのだろうか、この混合パターンから見ると、谷あるいは沢という言葉を使っていた民族の社会や文化の混り具合が複雑であったことが読みとれる。

この地域のもう一つの特異な現象として、東半部の正丸峠、伊豆ヶ岳周辺のかかなり広い範囲(東西6km, 南北15km)に、入という凹地形が集中していることである。地形的には谷や沢と何等変ることがないのにこれは何を意味するのか。各種漢和辞典で調べても谷や沢との関連を直接に示す記述は見当たらない。入の音は、ニュー、ジュ、ジャーなどで、字義は外から内へ向かって入れることとある。この



第5図  
飛驒山脈最北端地域 (隅田, 1998).

地区は、高麗を中心として、古来、高句麗の人々が住んでいた史実があるので、筆者としては、外人による言語と文字の移入を考えているが、おそらく語源的には、ニューなどの発音に解答が隠されているのではなかろうか。

## 5. 古代民族との接点

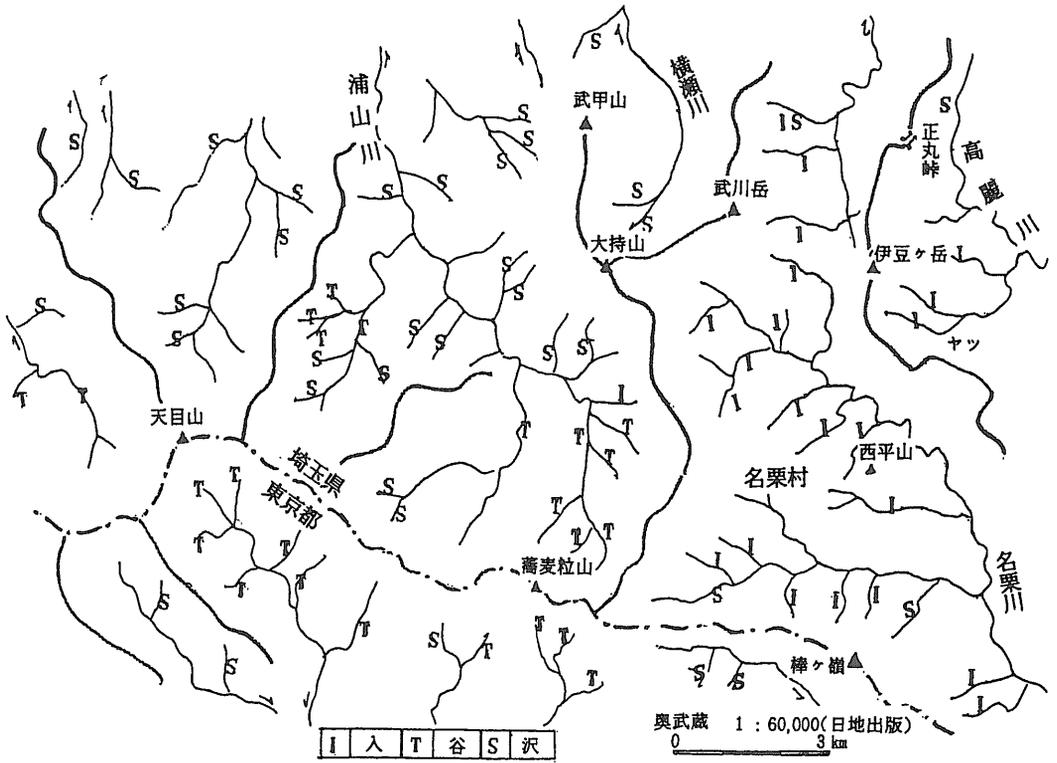
### 5.1 谷と沢の分布から考えられる古代民族の勢力圏

現在、我が国で用いられている地形関係用語や、それらを語尾とする地名は、漢字や稲作農耕文化が持ち込まれたとされる。約2,000年前から現在まで、政治、経済、社会、文化などの歴史を経て、日本語として統一されて来たものである。その間に、古生物と同様に、すでに絶滅したり、進化したり、また、変化、融合したりしたものが多い。

最初に、一般の言語研究によれば、谷と沢を異



第6図  
赤石山脈 (隅田, 1998).



第7図 奥秩父・奥武蔵地域 (隅田, 1998).

なる字義や解釈、ニュアンスをもつものとして取扱われて来たと話したが、実際に現地を歩いて見た感触からは、谷も沢も、また北海道の内も別も、大小、長短、深浅の差はあっても、水流地形という事からは大差はなく、ましてや、水量や植生で区別することはできない。涵沢という名は、水で涵れている期間の長い沢に名付けられた地名であって、この場合、西にあれば涵谷になり、東にあれば涵沢になる。参考までに日本河川辞典によれば、発想の原点で取上げた、深谷と深沢と同名の河川の地域は下記の様である。なお、一二の例を除いてすべて語尾に川がつけられているので、これを省略して記す。

深谷：富山県上新川軍，石川県金沢市，三重県飯南郡，滋賀県高島郡，奈良県吉野郡，奈良県御所市，奈良県宇陀郡，和歌山県西牟婁郡，島根県飯石郡，愛媛県新居浜市，愛媛県周桑郡。

深沢：青森県五所川原市，岩手県岩手郡，山形県最上郡，福島県南会津郡，栃木県芳賀郡，群馬県勢多郡，群馬県吾妻郡，新潟県中頸城郡，新潟県中魚沼郡，新潟県柏崎市，山梨県中巨摩郡，山梨

県北巨摩郡，長野県上高井郡，長野県上伊那郡，愛知県宝飯郡，愛知県新城市。

以上、述べて来た事から、端的に私流に言えば、谷を使っていた谷族と、沢を使っていた沢族なる民族が、相当に長い年月にわたって本州を二分して勢力拮抗して、その行動範囲のぶつかる地帯が飛騨山脈であり、その後、沢族(日本全土に定着していた土着先住民、時代関係から見て当然縄文人)は、関東地方から東北地方へ、更に北海道へと追いやられて行った。しかし、言葉は音として地名や話し言葉として残った。一方、九州以南へ追いやられた言葉は、屋久島をはじめ沖縄諸島の方言や地名に、そのレリックが残っている筈である。

### 5.2 谷族の起源

既述のように、谷族文化の勢力圏は、本州西半部、四国、九州であったこと、また谷という語の起源は朝鮮半島に今でも残っているタン、ダン、トンであり、一方、谷という字は中国渡来の漢字を当てたものである、ということに異論をはさむ余地は

殆んどない。三段論法式に言えば、谷族イコール古代朝鮮民族ということになる。古代朝鮮民族が彼等の言葉を、例へたとという言葉だけとしても、我が国の先住民に徹底して普及させる為には、余程、長期にわたる強い政治力と文化の浸透のあった事がうかがえる。

特に、埼玉県・秩父地方東部の高麗<sup>コウレイ</sup>の周辺は、古い朝鮮半島との人文的つながりが、我々の想像以上に深かったようである。山口恵一郎『地名を考える』には高麗について次のように書かれている。

「高麗は著名な古代の渡来人の地名。四世紀から六世紀にかけて朝鮮半島の百済との交渉が活発で、その頃、中国の政情の影響をうけて、七世紀の半ばには、百済、高句麗が相ついで滅亡した。その前後、例の高松塚で発見された壁画に示されたような、先進的な技術を身につけた渡来人集団が日本の技術を開拓していった。彼等の活躍舞台は、畿内をはじめ各地に散らばっているが、東国開拓に果たした力はとくに大きかった。「日本書紀」や「続日本書紀」にはこれらの歴史が記されており、八世紀のはじめには、高麗人1,792人を武蔵国に移して高麗郡をおいた。この高麗郡は明治29年に入間郡に合併されてしまったが、この地域は今の高麗川、入間川の上流に近い所であり、西部鉄道「こま駅」の周辺に相当する」。

### 5.3 言葉としてのサワについて

ここで、サワという言葉の語源を探ってみたい。

言語は、常識的に考えて人種とのつながりが非常に強く、外来人による余程の征服関係がない限り、一つの人種や一つの民族が先住の言葉を棄てることはないと思われる。例えば、インカ帝国は1532年にスペイン人によって完全に亡ぼされ、その後、本国から派遣された副王によって長く統治されてきたけれども、現在のペルーの公用語は、スペイン語と共にインカの言葉であるケチュア語である。ちなみに、インカ民族はアイヌ民族と同様に文字を持たなかった。

梅原 猛によると、世界的にみて、大多数の民族が外から来て先住民を征服した場合、外来の征服民族が圧倒的に少なく、且つ本国からの援助が得られない(軍事力はあっても、長期にわたって

文化全体までの征服に至らない)場合は、言葉において被征服者の言語に征服される、それが言語学の一つの法則になっている、とのことである。

別の例として、西洋にもゲルマン民族がイギリスに侵入し、イギリス王国をつくったが、先住のケルト民族の地名が多く残った。ロンドンやテムズ河は、「大胆な人の(土地)」、「暗い(黒い)川」を意味し、また、アメリカ大陸では、アーカンソー(川下の人)、イリノイ(人、男)、ミシシッピ(大きな川)など、州名のうち約6割が先住民インディアンの言葉である。

さて、日本の古語で、サワという言葉は何時の時代まで遡れるだろうか。

日本書紀・雄略2年(5世紀後半頃)の歌に、「遂に従(めく)りて林泉に憩(いこ)ふて藪沢(やふサワ)に相羊(もとほりあそびて)」や、万葉集のうち、およそ8世紀頃のものや伊勢物語にも「山田の沢」や「そのさわのほとり」などの言葉がみられる。日本文学史の初頭においては、説話や歌謡が口誦だけによって伝えられてきた期間は随分長く、それが文字に記載されるようになった時期が万葉時代であったし、使用される文字が漢字であったとされている。

以上のことから、5世紀～8世紀頃には、サワが普通に使われていたことは間違いないと思われる。

最近、民族としてアイヌと縄文人とのつながりや、古い大陸からの渡来人との混血を経て今の日本人が出来たという考え方が、この十年來の急激に増加した遺跡の研究から強くなってきた。

多くの研究のうち、頭骨の計測値に基づいて求められた縄文人と現代人の距離関係によると、「本州の縄文人の地域差は、せいぜい現代日本人の地域差程度である。また、縄文人の特徴的な部分は、8,000年もの長期にわたって変わることなく維持されてきた……」(『縄文人の生活と文化』鈴木公雄編)。

一つの人種の間では、頭骨とくに歯や顎の形の特徴が大きく変化しなければ、言葉は系統的小進化によって変化をするが、基本的な言葉の流れは受けつがれるであろう。

山口 敏(1990)によれば、頭骨形態小変異12項目に基づく「スミスの距離<sup>\*</sup>」の分析結果から、北

海道アイヌと縄文人は大変近く、日本人を含む東アジアのモンゴロイド諸集団からははるかに遠く離れている。また、「古墳人は縄文人と現代人の中間に位置せず、むしろ大陸の朝鮮人に近いとされている。

以上の様な考え方を土台として、多くの日本語の語源を探る為に、現在なお生存しているアイヌ語を媒介とする方法が最も近道であることが、鈴木健(2000)による『縄文語の発掘』に大変詳しく述べられている。それによると、サワについて最も解りやすい音変化の例は下記のようなのである。

ソー〔滝〕→サー〔断崖〕→サーヤ<沢、静岡・愛知県北設楽郡、谷川、小川、静岡県周知郡>→サハ→サワ(同義)。

ソー(滝)の一例としては、北海道の層雲峡がある。もともとは、アイヌ語でソウ・ウン・ペツ〔滝のある川〕と呼ばれていた。また筑波山麓の新治村に大字沢辺がある。採石で今は姿を消してしまったものの、かつては上流の景勝「一の滝」があったので、そのソー・ペ(滝の水)、あるいはソー・ペツ(滝の川)から地元の言葉でサーペ→サワベとなったのかも知れない。また、沖縄本島でソーというのは滝というよりも、沢あるいは泉水、泉川の方の意味のようだ、とも書いている。

#### 5.4 地名の源をたどる難しさ

既述のように、約2,000年前に大陸から渡来人がやってきて、古墳時代には、九州、中国から東海を経て関東地方に達した。茨城県では、彼等が稲作農耕文化を持込んだことが風土記に残されている。

「古墳時代、ヤマトの勢力の東方進出に対して、原住民達は自分達の生活を守ろうと必死に抵抗した。佐伯、国栖などと呼ばれる先住民達(当然縄文系の民)が、魚や貝類を生活の糧としていた干潟や谷津が取りはられ田畠にかえられて行った。当地にはアイヌ語として残っていた川を表す内(ナイ)を内(ウチ)と読み替えさせている。これはほんの一例であるが、縄文人の直系の子孫がアイヌであ

※スミスの距離：難項目かの形態小変異を用いて集団間の距離を、一種の多変量解析法を用いて求める方法。

るとすれば、縄文語はアイヌ語に引きつがれている筈である。日本各地には語源の解からない言葉が沢山あり、地名にも意味不明の字が当てられていることが多い」。

日本語の源泉をたどる作業を大変困難にしたのは、7～8世紀、律令国家がつくられた時代、即ち漢字の洪水的移入と、地名などの好字化(宛時化)によって、それより以前の言葉の歴史を被い隠したることによるとされている。

一例として、つくば市の語源を探ってみよう。ツクバ、これは「古事記(8世紀)」では、都久波、書記では、菟玖波となっている。この音をアイヌ語に求めると、ツクバ=tu〔二つの〕、ku〔弓〕、pa〔頭〕となり、筑波山の山形の特徴をよく表している。

語源を遡るためには、一度漢字をすべて取り払い、音名を一字一字細かく分解・分析して、アイヌ語や、韓国語、中国語その外、周辺の地方の古語(アルタイ、モンゴルなど)との対比をすることが必要であろう。

## 6. あとがき

ここまで話してきたことは、確かな答えというものではないかも知れないが、読んでいただいた方は、夫々に谷や沢という言葉の分布から、先住民や外国からの渡来人の文化とのかかわり合いに思いをめぐらされた事と思う。

最初は、単に谷と沢の分布から始まった話が、その言葉の由来から、その言葉を使っていた民族や時代にまで遡り、更に現在の日本の地名の源泉を探る領域にまで深入りしてしまった。

筆者にとっては、谷と沢の分布がほぼつかめただけであり、他の分野の問題は夫々の専門の方々にかかせるべきだと思う。しかし、日本の地名に興味不明のものが多く、言語学者達が語源を探る意欲を失っている、という事も聞いている。

谷と沢の分布を考えるだけでも、言語学、民俗学、考古学、人類学、地質学、地形学等の各分野の研究を横断的に考察し、とくに、現在生存しているアイヌの文化や日本全土の方言などから縄文文化への溯上が可能ではないかとの感触を得られたのは収穫であった。

そして谷や沢のほか、古代人の生活に必要な自

然に関する用語として、水、魚、木、草、山などの基本的な言葉について調べればどのような展開が見られるのか。

今回、調査の過程で、非常に沢山の縄文時代の遺跡・貝塚・洞窟名を知ったが、谷のつくものが見つからず、少数ながら沢はあり、里、森、台、平、浜等の地名が付けられているのは何を意味するのか。また、言葉の発音と頭骨の形態との音響学的関係にも興味が持たれる。

## 文 献

- 郡司隆男(1988):言語科学への招待。丸善(株), p.4-12.  
 鏡味完二(1981):地名の語源。角川書店, p.115, 126-127, 132.  
 河川大辞典。日外アンシェーツ(株), p.850-852.  
 小林達雄(1996):縄文人の世界。朝日選書, p.217-224.

- 楠原佑介ほか(1981):古代地名語辞典。東京堂出版, p.153.  
 世界大百科事典。平凡社, p.184.  
 隅田 実(1998):日本列島における、地形用語としての谷と沢の分布-古代民族の文化圏との接点を探る-。地下水技術, vol.40, no.12, p.4-12.  
 鈴木 健(2000):縄文語の発掘。新読書社, p.180-181, 188-189, 327.  
 鈴木公雄編(1988):縄文人の生活と文化。講談社, p.150-170, 180-184.  
 埴原和郎・梅原 猛(1993):アイヌは原日本人か。小学館創造全書, p.172-176.  
 山口 敏(1990):日本人の祖先。徳間文庫, p.44-72, 177-186.  
 山口恵一郎(1977):地名を考える。日本放送協会, p.122-124.

SUMITA Minoru (2001): Distribution of 'Tani' and 'Sawa' as topographic terms in the Japanese Islands. -A point of contact with sphere of the ancients-

<受付:2000年12月5日>

## お知らせ

日本地質学会金沢大会

### 市民講演会

主催:日本地質学会 後援:金沢大学  
 開催日時:9月23日(日) 14:00~16:30  
 開催場所:金沢市下本多町 電力プラザエルフ金沢 (MRO ホール向い)  
 講演題目(および講演者):  
 「海と地球」(海洋科学技術センター, 末廣 潔)  
 「恐竜時代の日本とアジア」(福井県立恐竜博物館, 東 洋一)  
 入場無料, 事前申込不要。

### 市民見学旅行

- ・いずれのコースとも先着順。定員になり次第締切
- ・申込方法:参加希望者は、希望する見学旅行のコース番号、参加者全員の氏名・年齢(学年)と代表者の連絡先(住所と電話またはFAX)を明記して、往復ハガキにて次のあてさきへ申し込んで下さい。(いずれも申込締切日9月7日必着)  
 〒930-8501 富山市新総曲輪1-7 富山県教育委員会文化財課溝口秀勝 TEL 076-444-3456 FAX 076-444-4438  
 E-mail: hidekatsu.mizoguchi@pref.toyama.jp (なお、選検当日の問い合わせは、TEL090-4326-1267 お願いします。)
- ・参加費:いずれのコースとも1人500円(当日集金します)

見学旅行名	見学コース	日程	定員	備考
1. 富山県大山町の恐竜化石発掘現場と富山科学文化センター 案内者:溝口秀勝 藤田将人	金沢駅西口(8:50)→砺波駅東口(9:40)→富山科学文化センター(10:30-11:50)→昼食→大山町恐竜化石試掘調査現場(13:30-15:00)→砺波駅東口(16:10)→金沢駅西口(17:00)解散 (雨天の場合は、解散が多少早まる予定です。)	9/16	30名	※小学生は保護者同伴、昼食は各自で持参。※化石探検体験(雨天中止)も予定していますので、汚れてもいい服装で参加すること。※砺波駅東口での参加・解散を希望される方は、その旨を葉書に書いて下さい。
2. 大桑層の化石掘り(金沢市内) 案内者:北村晃寿	金沢市大桑貝殻橋集合(9:00)→犀川河川敷にて化石採集(15:00終了、解散)(※大桑貝殻橋は、大桑野球場の近くにあります。)(バスを利用される方は、金沢駅西口7:45発 19番城南1丁目・大桑住宅行または金沢駅7:43発 22番大桑行に乗車され、大桑住宅まで下車してください。係員が案内します。)	9/23	50名	※小学生は保護者同伴、少雨決行、昼食は各自で持参、トイレは隣接する野球場のトイレを利用、駐車スペースは十分にあります。※バスで現地に向かわれる方は、その旨を葉書に書いて下さい。
3. 森本断層の活動で変形した地層の見学 案内者:石川県森本断層調査委員会委員 (代表:大村明雄)	金沢駅西口(9:30)→金沢市梅田町(トレンチ調査によって森本断層が確認された所)→石川県自然史資料準備室(金沢市米泉町4-11:断層露頭の剥ぎ取りを見学、雨天の場合、ここで昼食)→大桑町(犀川貝殻橋付近)→金沢市四十万町(卯辰山層/大桑層の逆転を観察)→金沢駅西口(16:00)解散	9/24	25名	※雨天等でコースの一部が変更される場合があります。※小学生は保護者同伴、昼食は各自で持参。
4. 金沢市内建築物に見られる化石探訪(金沢市内) 案内者:松浦信臣	ホリディ・イン金沢(金沢駅東口付近にあります)玄関前(13:00)→ヴィンテージ山岸商店→金沢スカイビル→香林坊アトリオーラプロ(16:00)解散	9/30	20名	※徒歩で移動します。小学生は保護者同伴。※半日コースですので、昼食は各自で集合前にすませておいて下さい。